

こんにちは♪ 先日、「**本屋大賞**」の発表がありました！ 本屋大賞というのは、全国の書店員がいちばん売りたい本を選ぶ賞で、エンターテインメント小説の賞としてはかなり信頼できる賞になっています。ちなみにこれまでの受賞作は、**小川洋子**『博士の愛した数式』、**恩田陸**『夜のピクニック』、**リリー・フランキー**『東京タワー』、**佐藤多佳子**『一瞬の風になれ』、**伊坂幸太郎**『ゴールデンランバー』、**渡かなえ**『告白』、**冲方丁**『天地明察』、**東川篤哉**『謎解きはディナーのあとで』、**三浦しをん**『舟を編む』、**百田尚樹**『海賊とよばれた男』、**上橋菜穂子**『鹿の王』、**宮下奈都**『羊と鋼の森』、**恩田陸**『蜜蜂と遠雷』、**辻村深月**『かがみの孤城』、**瀬尾まいこ**『そして、バトンは渡された』、**凧良ゆう**『流浪の月』、**町田そのこ**『52ヘルツのクジラたち』、**逢坂冬馬**『同志少女よ、敵を撃て』、**凧良ゆう**『汝、星のごとく』！ 本が好きなひとは「うんうん」でしょう？ さて、今回みごとに大賞に選ばれた作品は、**宮島未奈**『**成瀬は天下を取りに行く**』でした！ やっぱり。冗談で「成瀬が本屋大賞を取りに行く」と言っていましたw。本屋大賞史上一と言っているほど読みやすく面白い本で、しっかりと感動もさせてくれます。今号ではまずこの作品を改めて紹介し、そのあとで年度末に入ってきて貸出を待っている本たちを紹介します！

### 『成瀬は天下を取りに行く』 宮島未奈

デビュー作ながら、ダ・ヴィンチやキノベス！ほか、なんと九冠でランキングを席卷！さらにとどめに本屋大賞まで受賞してしまいました！まさに天下を取ってしまったわけです。「わたしはこの夏を西武に捧げようと思う」。中2の1学期の最終日、また成瀬がおかしなことを言い出した。いつだって成瀬はすごく変だ。幼稚園のころからほかの園児とは一線を画して何でもできたし、小学校の卒業文集に書いた将来の夢は「二百歳まで生きる」だった。「わたしはシャボン玉を極めようと思うんだ」と言うや、夕方のローカル番組「ぐるりんワイド」に出演するところまで行ってしまふ。西武に捧げるとは、毎日西武に通うということだ。地元民からこよなく愛されてきた大津市唯一のデパート、西武大津店が八月いっぱいまでクローズしてしまふ。「ぐるりんワイド」で生中継をするから、毎日通ってテレビに映りこむのだという…。「わたしはお笑いの頂点を目指そうと思う」。「かつてなく最高」の主人公、成瀬のキャラがいいのはもちろん、M-1目指してコンビを組まされてしまふ、幼なじみの島崎との距離感がいいです！成瀬が観光大使になったりもする待望の続巻『成瀬は借じた道をいく』もオススメ！

## オススメ本紹介！

### 『おしごとそうだんセンター』 ヨシタケシンスケ

「いいのよ別に。やりたいことなんてなくなっちゃって」。「え!?!? そうなの!?!」みんな大好きヨシタケシンスケさんの待望の新作は、「お仕事本」！とは言っても、いわゆる「ハローワーク」本とは違って、彼の仕事に対する視線はとってもやさしく、仕事をポジティブに受け止めることができるような本になっています。ようやくいまの仕事に辿り着いた彼の実感が込められているのでしょう。そもそも「おしごと」が何かさえわからない宇宙人が、仕事を探しに「おしごとそうだんセンター」を訪れます。係のお姉さんと話していくうちに、宇宙人は仕事について学んでいくのでした。宇宙人が「めずらしいおしごと」をリクエストしたので、さまざまな「ありそうだけどない」仕事を紹介され、ヨシタケワールドの「めずらしいおしごと」図鑑としても楽しめます！「おしごとをすることで、『自分ってなんなのか』『世界ってどういうところなのか』『自分にとって大事なことはなんなのか』が、すこしずつわかってくる」。「それが、おしごとをすることの一番大事で、おもしろいところだと思うのよ」。

### ☆『冬に子供が生まれる』 佐藤正午

直木賞受賞作で映画化もされた『月の満ち欠け』から7年！新たな傑作の誕生です！前作で「転生」が描かれていたように、今作でも「UFOとの遭遇」「人格の入れ替わり」というオカルトめいた内容が、実に本当らしく語られていて驚かされます。「今年の冬、彼女はおまえの子供を産む」。七月の激しい雨の真夜中、丸田君はスマホでこのようなまったく身に覚えのないメッセージを受けとる。バンドで売れた高校時代の同級生がテレビに出ているのを観た直後だった。その番組にはおかしなところがあった。丸田君は小学時代から「マルユウ」というあだ名で呼ばれていたのだが、テレビの元同級生達が「バンドのオリジナルメンバーのベーシストで、売れる前に抜けてしまい有名になりそこねた男」について語ったとき、その男のことをマルユウと呼んでいたのだ。マルユウは僕なのに。テレビを観、メールを読んだ丸田君はこう思っていた。「僕は大事なことを忘れていたのかもしれない。何かとてつもなく大きな約束を果たさないまま生きているのかもしれない。漫然と、平気でいまままで生きてきたのかもしれない。そしてそのせいできっと誰かに歯がゆい思いをさせている。失望させている。誰か、顔は見えないけれど、どこかにいるその誰かを、深く失望させている」。

### 『シャーロックホームズの凱旋』 森見登美彦

「どうもおかしいな。天から与えられた才能はどこへ消えた？」舞台は、ヴィクトリア朝京都！あのシャーロック・ホームズがスランプに陥ってしまったという設定です。森見登美彦氏ならともかく、あのホームズが！「僕はもう自分自身という難事件に取り組むのに疲れ果てた。僕はただダメになった。それだけのことなんだ。もう何も考えず、ただ静かに暮らしたい」。ホームズのセリフは、そのまんま書けなくなった森見氏の嘆きのようです。スランプになったホームズは1年間、部屋に籠もりつきりで、何もせずにグータラしているのです。さすがにそれを見かねたワトソンは、ホームズに復活してもらおうと働きかけますが、同じくスランプで大学の研究所を辞めてしまったモリアーティ教授と、ホームズが事件を解決してくれないので自力ではまったく役立たずのレストレード警部と「負け犬同盟」を結成し、駄弁を弄しては互いの心の傷をぺろぺろ舐め合うばかり。ホームズのスランプの原因は、12年前の未解決の少女失踪事件「触れられたくない過去」にあるようなのですが…。

### 『リラの花咲くけものみち』 藤岡陽子

吉川英治文学新人賞・未来屋小説大賞W受賞作！「北海道の大学で獣医師を目指す聡里は、自然に、生き物に、人に、育てられてゆく」。獣医学部のある北海道の大学・北農大学に合格した聡里は、合格後に初めて北海道に行き、大学へと続く白樺並木を祖母と歩くことになるのだが、その道のりは平坦ではなかった。小4で母を亡くし父と二人で暮らしていたが、小6のとき父が再婚し妹が生まれて、父が単身赴任をして父のいない環境で継母に疎まれたのだ。唯一の救いだった飼い犬のパールを「犬アレルギーがあるみたい」と手放すように命じた継母には逆らったが、自分がいないあいだにパールが捨てられるかもしれないという恐怖感から家を出られなくなり、それから3年間、聡里は不登校になってしまうのだった。15歳の誕生日に、祖母のチドリが突然家を訪れると、聡里のその姿を見ただけですべてを察し、家族が戻るや「聡里を引き取らせてもらいます」と言い放ち、パールと自宅へ連れて帰ってしまった。チドリは聡里を高校へと通わせ、やがて憧れていた獣医師になれるように大学へも行かせてあげるのだった。大自然のなかの慣れない寮生活なんかにも挫けずがんばる聡里だったが、馬の出産の事故で、子どもの命を奪わねばならない場面に立ち会ったとき、初めて「獣医師になりたくない」と思う。獣医師とは、動物の病気を治し、命を救うだけがその仕事のすべてではないのだ。

### 『東京都同情塔』 九段理江

芥川賞受賞作！「質問すれば何でも答えが出てくると思っているところがAIネイティブの嫌いなところ。私はAIじゃない。まず自分で推測したり解釈したりする癖をつけたらいいよ」。舞台は、あのザハ・ハディドによる新国立競技場案が白紙撤回されずに実際に建てられたもう一つの未来の東京。壮麗なそれと対になる美しすぎる巨大な塔（71階建て！）を設計することになった牧名沙羅は、塔の名が「シンパシータワートーキョー」とされることに強い嫌悪感を持っている。浮浪者をホームレス、育児放棄をネグレクトというように何でもカタカナにしてしまうネーミングセンスに辟易しているのだ。シンパシータワートーキョーは刑務所である。入居者はすべて犯罪者だ。寛容論の果てに、犯罪者をホモ・ミゼラビリス（同情されるべき人々）として定義しなおし、世界一幸せな、平等主義が実現された夢のような快適な刑務所であるから、シンパシータワートーキョーなのである。恋人は、塔を「東京都同情塔」と呼んだ。新しいランドマークとなる塔は、その名前で広まることになる…。「ここは刑務所じゃなくて、ドージョートーなんです」。この小説でAIが回答する部分は、実際にAIを使って書かれたそうです。

### 『風に立つ』 袖月裕子

「俺は親父のことを何もわかっていないのかもしれない」。家庭裁判所の補導委託制度。問題を起こし家裁に送られてきた少年を、一定期間預かる制度。岩手県盛岡市にある南部鉄器工房「清嘉」を営む親方を父に持ち、そこで働く38歳の悟は、父が補導委託の引き受け先になると突然言い出して、反発する。16歳の少年を預かるということだが、父親はまったく父親らしいことをせず、自分としっかり向き合ってこなかったと感じていたからだ。少年はいわゆる非行少年ではなく、真面目な少年だった。しかし、なにか悩みを抱えているようだった…。

### 『世界』 junaida

「これは、はじまりとおわりの物語。junaidaがおくる、絵を読む絵本」。junaidaさんが「世界」を1冊に閉じ込めた、文字のない絵本。ページをめくっていくうちに、「あれっ、ひょっとして…」と思いついて、最後に「やっぱりそうだったんだ！」とわかるしかけになっています。驚きがあります！junaidaならではの絵本ですね。表紙の王冠マスク(?)はjunaidaさんの赤！赤ちゃんから老人になるまで成長していきます。最初と最後のページに、鳥とユニコーンが描かれています！